



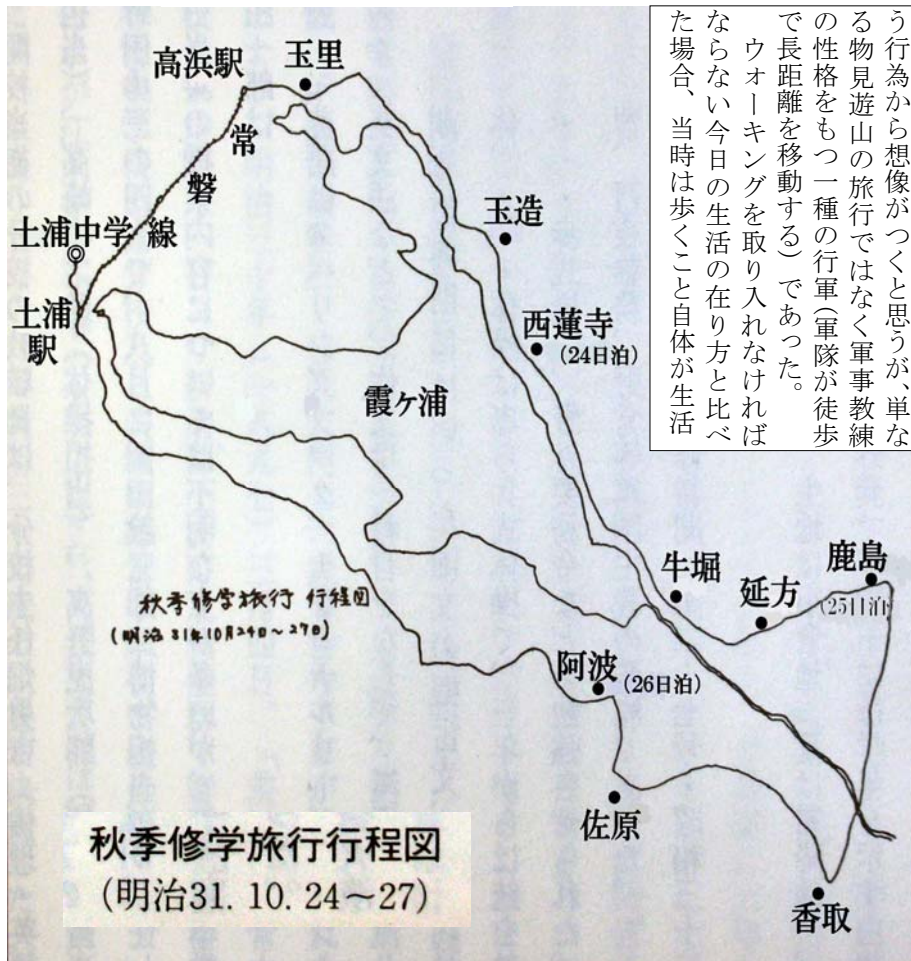
第38回歩く会(平成18年10月)

今年の「歩く会」はいかがでしたか。秋空の下、大いに楽しまれたことでしょうか。「歩く会」は、全国各地の学校で行われていますが、その性格や目的は様々です。並木高校や水戸一高のように昼夜兼行で歩く心身鍛錬的なものもありますが、本校の「歩く会」はそれとは趣を異にしていますね。一高祭直後から歩く会実行委員会が、25km前後の距離を目安に交通面の安全・昼食やトイレなどの休憩場所等を検討し、いくつかのコースを設定し、アンケートも取り、委員が下見をして決定するユニークで綿密な企画運営をしています。従って毎年コースは違います。生徒の歩き方も様々です。ひたすらゴール一番のりを目指しての一人歩き、あるいはグループでお喋りを楽しんだり、道すがらいろいろな発見を楽しんだり。「歩く会」は伝統的に行われてきた全校マラソンが、交通事情によって実施が困難になったため、これに代わるものとして、昭和48(1973)年に発足しました。さて今回は、土浦中学校時代の鍛練の修学旅行を垣間見ましょう。

### 分校時代の修学旅行

本校最初の修学旅行は、開校直後の明治30年6月12日に実施された筑波山への一泊徒歩旅行であった。(残念ながら、この時の詳細は不明である)翌31年には春と秋に2回、成田・鹿島方面への修学旅行を行っていた。明治31年5月24日、1・2年生約200人がラッパの音を合図に隊伍を組んで出発。銭亀橋(桜川)を渡り、小松・阿見を経て江戸崎に着き、龍承寺に泊した。翌朝利根川を越え、滑川・成田間は汽車を利用し、宗吾神社(佐倉藩の圧政を将軍に直訴した義民木内惣五郎を祀る)と成田不動尊を拝し、この地に泊る。帰途の26日は印旛沼を眺めながら、女化(牛久市)を経て、牛久駅に至り、土浦へは汽車で帰った。

霞ヶ浦一周の修学旅行行程図



同年10月には、霞ヶ浦一周3泊4日の秋季修学旅行を敢行した。土浦から高浜までは汽車、それ以降は湖岸に沿ってひたすら歩くというものであった。西蓮寺(現行方市、天台宗の寺院だが宗派の別なく尊崇を受けていた)に泊し、翌日は鹿島に至り、宿泊。3日目は香取・佐原を廻って利根川を渡り、阿波(現稲敷市)に泊り、翌4日目に土浦に帰着した。これら2つのコースは、当時の霞ヶ浦・利根川を中心にした一連の水運の状況を実地に見聞することが出来るものであった。同時に、敬神・崇仏の心を涵養する意味があったとも想像できる。しかし、交通機関が未発達だったとは言え、この長距離を歩くという行為から想像がつくと思うが、単なる物見遊山の旅行ではなく軍事教練の性格をもつ一種の行軍(軍隊が徒歩で長距離を移動する)であった。ウォーキングを取り入れなければならぬ今日の生活の在り方と比べた場合、当時は歩くこと自体が生活

そのものであって、健康が生活の中で自然に維持されていたように思われる。開校3年目の10月には、3年生約50名が、日光への修学旅行を行ったが、往路の小山・栃木間と帰路の日光・宇都宮・小山間は鉄道を利用したもの、他は、6日間で60里(約230km余)を歩き切った。分校時代、修学旅行とは銘うっているが、今でいう「歩く会」そのものであった。それでも、当時の生徒達にとって修学旅行は一大イベントであり、大きな楽しみであった。明治期の機関誌「進修」各号には数多くの修学旅行記が掲載されている。分校から独立した土浦中学校の修学旅行については、大正期に始まった関西修学旅行も含めて、次号で紹介したい。

### 修学旅行ノ記

第一年級 瀧原 三津五郎

我が土浦中分校へ、十月十五日秋期修学旅行ヲ舉行セラレ、三年生ハ下野日光ノ廟ヲ拜シ、二年一年兩級ハ久慈郡太田地方ノ山水ヲ跋涉セントス、兩級ノ生徒凡二百十餘名、之ヲ二小隊六分隊ニ編成シ、各外套及ビ白米壹升二合ヲ携帶ス、十月十五日 朝來曇十一時頃ヨリ雨降ル、午前六時三十分第一教場ノ体操場ニ集合シ點檢ヲ行フ上原教諭中隊長タリ、久保田教諭及ビ徳弘島田ノ諸教師監督タリ、七時五分喇叭ノ響ト共ニ校門ヲ出デ歩調勇シク中城町ヲ經テ停車場ニ至リ、八時十分發ノ降リ



「進修」第2号表紙(上)と秋期修学旅行記(左)